
二光秒

みやひろかず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二光秒

【Nコード】

N1341E

【作者名】

みやひろかず

【あらすじ】

二光秒の距離を隔てて対峙する無人宇宙戦艦と狙撃専用の宇宙艇。はたして勝利するのは・・・

二光秒その1

かすかな瞬きすら許されない星々の光が、静寂に包まれた空間の中に充滿していた。

遙か数百光年先で起きている超新星爆発のざわめきや、近くの銀河の中心で回転するブラックホールの唸りは、ここまで届かない。変わり映えのないイメージだ。

一瞬の後、視界の右下隅の星が揺らめいた様に感じられたかと思うと次々と消えていった。

来た。宇宙戦艦ドーミエだ。

ドーミエは、先頃無人で運用するための大改修が行われ、その実用試験のためにこの空域を通過するのだった。定点観測衛星のカメラはこの時を待っていたのだ。

画面の中の星たちが消えてゆくにつれ、ドーミエの真つ黒な船体が見えてくる。この時代、隠れるところの無い宇宙戦闘において、単純な光学探知装置の方がレーダーよりも有効である、と考えられていたため、迷彩としての黒塗装がもてはやされていたのだった。

ドーミエは上下の双胴船である。下の方の船体が少し短いだけで、ここまで同じなら左右の双胴船と見分けがつかない。その細長い船体のやや後方寄りに艦橋のようなものが上下につき出している。

カメラの画面いっぱいにはドーミエの黒い船体と申し訳程度のライトの光が迫る。まさに今、ぶつかりそうになったとき、カメラはパンをして真横を通り過ぎてゆく黒い船体を追った。もし衛星に人が乗っていたら、怒鳴り散らしていただろう。それほどのニアミスだった。全自動のコンピューター制御とはいえこれくらいのことはいかたが無いのかもしれない。カメラは、遠ざかるドーミエを見送っている。ドーミエは軽く加速しているらしく後方から青白い炎を吐き出している。それに合わせてエンジンのコロコロと小気味良い音が……。

次の瞬間。カッという音と共にドーミエが光に包まれて爆発した。すぐさまカメラの画面にたくさんの破片が飛び込んでくる。さまざまに大きさの破片が衛星に当りガリガリと大きな音を立て、次いで怒涛の激流と化したガスの流れがシューという音を立てて流れ去った。

やがてクリアになった画面には、ドーミエが、上の艦橋を中心にして破片を掃き散らしながら回転する様子が映っていた。実は、そこは艦橋ではなくMBHガンの砲塔なのだ。MBHガンとは、マイクロブラックホール砲の略で、二つのマイクロブラックホールを互いに回転させ、その間に任意の角度で物体を打ち込むと亜光速で飛び出してくる、という性質を利用した宇宙最強の大砲である。

よく見るとドーミエは下の船体の一部と下の砲塔が消失している。残った上の砲塔のマイクロブラックホール二つ分の質量と、船全体の質量がつりあったため、砲塔付近を中心として回転しているのだった。

二光秒その2

さて、さっきから音がどうのこうのと書いているが、宇宙空間で音が伝わるわけ無いだろう、とツツコミを入れている読者も多いと思う。

しかし、宇宙空間でも音が伝わるのだ。

宇宙開発初期の小さな宇宙船ならまだしも、巨大な宇宙戦艦が星を砕くほどの威力をもった兵器でやり合う様になって、人々は初めてその音に気づいたのである。

われわれは、昔から媒質を必要としない波を二つ知っている。一つは光波だが、もう一つの波、重力波がその音の正体なのだ。爆発などで急激に質量が散失したとき、ソリトンと化した重力波が発生し、人間が乗っている宇宙船の船体を叩く。たたかれた船体は空気を振動させ、その音を人間が聞き取るのだ。

一方、ドミエの中ではメインコンピューターが復旧作業のための作業を始めていた。手始めに被弾状況把握だ。これはさすがにコンピューターだけあってあっという間に情報が蓄積されてゆく。情報が入ってこない部分は汎用ロボットを使って直接調べさせ、同時に修理もさせる。直ぐにコンピューターは回転している船体を止める為バーニアをふかし始めた。損傷率32パーセント、それでも戦闘継続可能と判断したのだった。

反撃するためには敵の位置を特定しなければならぬ。被弾前の映像には手がかりがなかったが、被弾後の光学探知装置の映像にうつすらと光りの帯が発見された。飛び散った船体の破片に、第二撃のレーザー光が散乱されているらしい。コンピューターは、回転による映像のぶれを補正しておおよその敵の方位を割り出し、最終的な姿勢制御を加え、敵がいる方位へ向けて船体を停止させた。セオリーとして敵から見える範囲を小さくし被弾率を下げるのだ。

さていよいよ反撃だ。第一撃から5分以上、さっきの光りの帯び

が第二撃としても、次の攻撃が当たらないということは、敵はかなり遠方から攻撃していると判断される。MBHガンが軽い唸りを立てて比較的大きな船体の破片を試し打ちをした。やはり船体のバランスが悪いため照準に誤差が出るようだ。このままなら一光秒先では200メートルぐらいのずれが生ずる。しかし贅沢を言って入られない、使えるだけまだマシだった。もし残された方のMBHガンの中で機械の回転が止まっていたら、砲台ごとひきちぎられて遙かあなたに飛び去っていただろう。そうなっていたら、残った兵器では反撃のしようが無かったのだ。

まず手始めに敵のいそうな範囲の光る点にむけて弾を一発ずつ撃つてみることにする。2千個ぐらい有るが10分も有れば終わるだろう。運がよければ敵を粉碎することが可能だ。

船内では、損傷の程度が酷く給弾装置が故障する可能性も合ったので、通路に仮設されたレールの上を運搬専用のカーゴロボットたちが下のMBHガン用の弾を上に乗運んでいた。なにせ急場凌ぎの改修だった為、人が使う部分を潰してロボットの動く場所を確保したのだった。そのうちの一台がレールの継ぎ目に引っかかって転倒し、直径5センチぐらいの球形の弾を撒き散らした。弾はマイクログラックホルルの重力の影響下で天井に張り付くようにして跳ね転がってゆく。その先でたまたま廊下の点検をしていた汎用ロボットの頭部に弾が当りロボットは転倒した。が、カーゴロボットは躊躇せず弾を拾い上げ去っていった。あとに残された汎用ロボットはなんとか一人でたちあがったものの、動きがおかしく、頭には凹みが出てきた。

二光秒その3

不幸な汎用ロボットのことはさておいて、ここではカーゴロボットの後をついて行くことにしよう。

カーゴロボットは狭い通路を抜けMBHガンの心臓部に降りて行く。本来は上つてゆくと言うほうが正しいが、マイクロブラックホールの重力のせいで降りてゆくように見えるのだ。

内部では直径数十メートルの巨大な平たい円筒形の部品が回転している。よく見ると真中にスリットが入っていて、その溝の奥に二つのブラックホールが離れて固定され回転している。円筒形の外側には天文台のドームのようなカバーが付けられている。そこにもスリットが入っていてそこから亜光速に達した弾がとびだしてゆくのだ。

カーゴロボットはドームの反対側にある弾の発射装置の近くにコンテナを積み上げると、もと来た道を引き返してゆく。

次に、発射装置を見てみよう。発射装置は約4キログラムの弾を一秒間に3発、秒速10キロメートルで打ち出すことが出来るレールガンで、単独で取り出しても兵器として通用する。弾が球形をしているのは重力の影響が均一に伝わらないと壊れて破片が散らばる危険が有るからだ。

そしてレールガンから発射された弾は回転する円筒形のスリットから中に入り第一のブラックホールを追いかけるように近付き、重力で円筒の中心方向に向かって加速され、第二のブラックホールの後ろを通る。より大きな引力で捕らえられた弾はそのまま第二のブラックホールの周りを回ろうとするが、半周も回るとブラックホールが逃げてしまったため重力のくびきから解放され飛び出してゆくのだ。

それではここからドミエを離れて、MBHガンの弾についていてみよう。ただ惜しいことに光速の30%の速さでは光行視差も

スターボウも見ることは出来ない。

二光秒その4

弾の後を追って約六秒後、弾から離れ下のほうに目をやるとなにやら黒い物体が見えてきた。それは全長200メートルにも達する細長い棒状で、ドームエの方向にその先を向けながら横に動いている。これこそ先ほどらい、ドームエに対して2光秒の距離を隔てて攻撃を仕掛けている狙撃専用の宇宙戦闘艇、D・スパイダー号のレーザー砲なのだ。D・スパイダー号の本体はまだ遙か1000メートル先に存在する。6基のレーザー砲が、1000メートルのワイヤーで繋がれ展開している。その形が蜘蛛の巣を連想させるため、本来の無味乾燥な形式名称よりもD・スパイダー号という愛称で呼ばれていた。

D・スパイダー号の本体はあまり大きくない、全長100メートル足らずで先端に電光掲示板のような六角形の板がついている。本体はその陰に隠れ敵の目をくらますのだ。電光掲示板といってもちやちい作りでこれで戦艦の光学探査機器を誤魔化せるものだろうかと言う人もいる。しかし一光秒以上離れると戦艦の光学探査機器のディスプレイ内では、D・スパイダー号の本体は2、3個のピクセルを占めるだけなのだ。実際もつと性能の良い光学探査機器もあるのだが、戦艦に載せるには耐久性という観点から問題ありとして現在の性能に落ち着いているのだった。

レーザー砲が本体の2倍の長さがあるのは、本来そんなに長く必要ないのだが、敵が何隻かかたまっている場合、漏れた光が敵に見つかりと反撃されるのであるべく長い砲身を使いレーザーを収束させて光が漏れないようにしているのだ。移動時には6基のレーザー砲がぴたつと張り付いて鉛筆を束ねたようにしか見えないD・スパイダー号だが、戦闘時にはレーザー砲の支持部分が回転し遠心力でレーザー砲を展開する。攻撃する部分とコントロールする部分を離すことで生存性を高めているのだ。しかも、回転しているうえ六基

の砲をランダムに撃つため何処から撃っているかが判りにくいと
いう利点もある。その上、各レーザー砲にはドームエのそれより性
能が落ちるが、光学探査機器が付いていて直径2000メートル並
みの解像度を持つ光学探査機器としての性能を持つのだ。

二光秒その5

「おかしい。あれだけの回転からこんなに早く復旧し、態勢を立て直せるはずが無い。中の人間はミンチ状態のはずだ・・・」D・スパイダー号のコックピットでつぶやいているのは、ドブロクニクという男。ありとあらゆる宇宙の戦場をまたにかける傭兵で、ここ数年はD・スパイダー号のパイロットをしている。人付き合いの少ないドブロクニクにとって狙撃という任務の性格上、一人乗りであるこの船はお気に入りの仕事場だった。でも、このD・スパイダー号という名前はダサイと自分からは使うことは無い。

・・・ココココココ・・・

ドブロクニクの頭の中でMBHガンの弾が亜光速で掠めてゆく音が響いた。重力波で伝わる音は光速なので人間の耳では音源を特定することができない。大抵は頭に一番近い物体から発するように聞こえるか、頭蓋骨を直接揺さぶられて頭の中で音が響くことが多い。今回は頭の中で響いているようだ。

「いやな音だ」

ドブロクニクは思わず頭上を見ながら呟く。宇宙で音が聞こえるときは戦艦の爆発とか巨大なエネルギーが開放される時。もちろん死人もたくさん出る。だから死神の囁き声とも呼ばれているのだ。遠くから近づいて来て、また遠くへ去ってゆく方向が確定できない音。さすがの歴戦の勇士ドブロクニクでもこの音に慣れることは無かった。

だが、今は気にしている時ではない。二発も撃つたのに敵を沈黙させることが出来なかった。いつもなら最低二発で止めを刺していたのに。何処をしくじった？最長狙撃距離の記録を更新しよう、などと奮った考えがあったのか？いや、こいつの性能なら十分可能だったはずだ。

ドブロクニクの頭の中でさまざまな考えが交錯する。そして三発

目を発射することに決めた。もしはずしたらさっさと撤収しよう。ここまでこちらの位置を知られてしまつてはヤバイ。遅かれ早かれMBHガンの餌食になつてしまつたろう。

ドブロクニクは、モニターを見ながら最終調整を開始した。そのモニターの画面中央にはこちらに正面を向けた宇宙戦艦が映つていた。ドブロクニクはモニターの自動追尾モードをオフにしてみた。画面中央の宇宙戦艦が右に動いて行く。思った以上速い動きだ。一秒間に10ピクセルは移動している。コンピュータの解析に拠れば微妙に加減速を繰り返しているようだ。いくらレーザー砲でも2光秒の距離を進むのに2秒はかかる、その間に動く敵の位置は推測するしかない。コンピュータにいくつかの候補を出してもらつてその中から人間が選ばなくてはならないのだ。ドブロクニクは今まで二発撃てば大抵の敵は落としてきた。しかし、今三発目を撃とうとしている。これは屈辱なのか、自問するドブロクニクはその考えを振り払うようにして、自らのカンを信じ砲撃のコースを選んだ。「さて」とドブロクニクは呟いた。

一瞬の沈黙の後、ドブロクニクはレーザー砲の発射ボタンにかかつていた指に力をこめた。と同時に撤収の準備をするために砲塔のワイヤーを巻き取りを始めた。

二光秒その6

二秒後、ドームエの右舷をレーザーが掠めて行った。船体表面がまばゆく輝く。装甲自体にはたいした被害は無かったものの二基のカメラが破壊された。しかしその破壊される寸前、カメラは急に輝きを増した点を写し出していた。

ドブロクニクはしくじった。この中途半端な攻撃が自分の居場所を敵に知らせることになってしまったのである。本来なら、D・スパイダー号の機能から砲の位置が特定されても本体は無事なのだが、ドームエのMBHガンは本調子でない。

約六秒後、MBHガンの弾がD・スパイダー号のレーザー砲の一つを直撃した。あと200メートルぐらいでレーザー砲を巻き取りきり回避行動をおこす筈だった。爆発の衝撃を感じたドブロクニクはすぐに自分の敗北を感じ取った。そして躊躇せずに残った砲台を切り離しコックピットに衝撃吸収用の泡を充填した。後はコンピューター任せで回避行動をするだけだ。

爆発が近すぎるため、その爆炎を背景にデススパイダー号の本体が黒く浮きあがり敵に察知されるまでに二秒、敵のMBHガンが新しい攻撃目標にねらいをつけるまで一秒、そして六秒後、こちらの本体に向けて弾が嵐のように到達するだろう。

それがドブロクニクの考えだった。あわよくば逃げられる。

しかし、願いもむなしくMBHガンの弾がD・スパイダー号の本体を直撃した。

あれから何日たったろう。ドブロクニクはベッドの上にくくり付けられていた。十箇所近い骨折と全身打撲。D・スパイダー号をこなごなに粉砕したあの爆発でよく死ななかつたものだ。衝撃吸収用の発泡剤のおかげだった。

「お目覚めですか」

寝ているドブロクニクの顔を汎用ロボットが覗き込んだ。

「元氣そうですね、いや元氣が何より。それにしてもなんて回復力なんでしょう。だてに半分近く私達の仲間じゃ無いってことでしょうかね。あ、そうそう。いよいよギプスがとれて上半身を起こすことが出来るようになります。えーとドブロクニク・・・」

そう、ドブロクニクはサイボーグなのだ。

「何度言ったら判るんだ、俺は一匹狼の傭兵だ、階級なんて関係ない」

「しかし、捕虜になった以上そういったことはチキンとしておかないと」

「傭兵は捕虜にならないんじゃないかな」

「いやその辺は人道的見地といえますか・・・。そうそう将軍が伝説の傭兵であるあなたにお目にかかるのをたいそう心待ちになさっております。そういった意味ではお客様として対応させてもらっています」

なにを言ってやがる。敵の情報を知りたいだけだろうが。にしても毎日同じ話ばかりしやがって、この凹み頭野郎が！ドブロクニクは心の中で呟いた。

「それでは、何か用事が有ったらいつでもお呼びください。あ、そうそうこの船は無人で与圧してある部屋は此処だけですのぐれぐれも逃げ出そうとしないでくださいね」

一通りの世話を終えて汎用ロボットは出て行った。その気配が消えるのを待つてドブロクニクはベッドから降りて立ち上がり背伸びをした。

「何が上半身を起こすことが出来るだと。なめるんじゃないよ」
その部屋に監視カメラが無い筈がないのだがどこかおかしいこの対応。自分の攻撃が、このドーミエの機能をおかしくしているらしいことは判る。付け込むとしたらその点なのだが、ドブロクニクはまだ逃げ出す方法を考え付いてはいなかった。

「ま、時間はまだあるか・・・」

歴戦の勇者は気楽そうにそう言って再びベッドに横になった。
窓の外には、かすかな瞬きすら許されない星々の光が、静寂に包
まれた空間の中に充満していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1341e/>

二光秒

2010年10月29日13時28分発行